
祓魔師と新選組

彩斗。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

被魔師と新選組

【Nコード】

N2772Y

【作者名】

彩斗。

【あらすじ】

奥村燐の父親、藤本獅郎は息子の燐を守るためサタンと戦い命を落とした。聖騎士^{パラディン}だった藤本が死んだため、聖十字騎士團は新たな聖騎士を選出した。

ひのもみじ

氷野紅葉

せんとあやし

閃羅彩斗

紅葉と彩斗は2人で戦う世界でもめずらしい被魔師だった。

2人は聖十字騎士團創立以来の最強の被魔師と呼ばれていた。
そんな2人が新選組のいる世界に何故か来てしまった…？

最強の被魔師と謳われている2人が新選組の運命を変える！

この小説は紅葉or紅蓮の所で書いている『新選組居候物語。
の閃羅彩斗と氷野紅葉とほぼ一緒です。』

紅葉とはリア友で許可を得ていますのでパクリではありません！
後、この小説の彩斗は腐女子& a m p・変態ではありません。

オリキャラ紹介！（前書き）

主人公二人のキャラ紹介です（、・ω・、）
たまに変わるかも^q^

オリキャラ紹介！

氷野紅葉
ひのもみじ

聖十字騎士團階級：
パラディン 聖騎士

称号：
マイスター ナイト ドラグーン テイマー
騎士・竜騎士・手騎士

戦いの最中は冷静沈着。

攻撃型被魔師。

心を開いた人達にはめっちゃフレンドリー。

ありのままの自分で接する。

人があまり得意ではないためめつたに心を開かない。

藤本神父の付けていた十字架を首から下げている。

腰に巻いているウエストポーチの中にはナイフや銃、銃の弾や聖水などが入っている。

好物はチュッ○チャップス。

使用武器：
二丁拳銃・地獄剣（魔剣）

使い魔：
地獄の番犬ケルベロス（上級悪魔）

閃羅彩斗
せんらあやて

聖十字騎士團階級：聖騎士

パラディン

称号：マイスター 医工騎士・ドクター 詠唱騎士・アリア 手騎士・テイマー

明るい性格。

後方支援の被魔師。

基本フレンドリーな子。

人が苦手で、あまり心を開かない。

人を信じたいけど信じれない。

精神病を患っている。

肩から下げているボストンバックの中には医療道具や聖水、聖書などが入っている。

最近の趣味は新薬の開発らしい。

使用武器：聖書・いざというときのナイフ

使い魔：守護悪魔

アガレス↓攻撃系

フェニクス↓回復系

ハルファス↓防御系

守護悪魔とは上級悪魔の一種で、自分の星座によってタイプが異なる。

彩斗は牡羊座なため、アガレス・フェニクス・ハルファスの三体が使い魔となった。

詳しい事は後日彩斗の書いた絵を載せます！

下手ですが…（、；

プロローグ（前書き）

注意

- ・この作品は紅葉or紅蓮のところで連載している『新選組居候物語』に出てくる主人公2人と一緒です（紅葉からの許可は取ってます）
- ・青の抜魔師と薄桜鬼の混合小説です。
- ・燐と雪男はそのうち出てきます（たぶん…、）

それでもいいぜ！という人はどうぞ（*´、´*）

ブローグ

氷野紅葉、閃羅彩斗…2人を聖十字騎士團・聖騎士に命ずる。

聖十字騎士團・最高顧問の三賢者が、静かに、凜とした声音で告げる。

俯いていた二人の少女は顔を上げ、口を開いた。

「はい。この氷野紅葉」

「閃羅彩斗」

「「聖騎士の名に恥じぬよう努める所存」」

＊

「足元気を付けろよー。あ、おい燐！お前尻尾隠せ！」

前を歩く尻尾を揺らした少年にそう言ったのは氷野紅葉。

「あ？何でだよ。もう皆知ってんだろ？」

訝しげにそう言ったのは、奥村燐である。

彼は虚無界に住む全ての悪魔の創造主、サタンの落胤らくいんとして生まれ、その証である「青い炎」を継いでいる。

そんな彼の隣に茶髪の少女がしゃがみ、諭す。

「一応念のため、ね？もし他の被魔師がいたら大変でしょ？」

優しくそう言ったのは閃羅彩斗。

「まあ…そうだけだよ…」

「兄さん、仮にも2人は上司なんだから言っこと聞きなよ…」

ハア、と溜息を吐いたメガネを掛けた少年は奥村雪男。

聖十字騎士団・日本支部に所属する、中一級被魔師だ。

そして奥村燐とは血の繋がった正真正銘の双子の兄弟である。似てないが。

「つーかオイ雪男、お前今『仮にも』つつたよな…。どういう意味？」

「え、い…いや……深い意味はなくて…」

「それもそれで腹立つんだけど…。まあいいか。敬語もやめろよ」

「え！？でも上司ですし…」「幼馴染でもあるよ？」「………」

…無理です！」

「んじゃ上司命令つーことで」

紅葉の言った横暴な言い分に、頭を抱えて呻く雪男。

この二人の少女、氷野紅葉と閃羅彩斗は、二人一組で戦う、世界でもめずらしい被魔師である。

紅葉が騎士、竜騎士、手騎士の3つの称号を持ち、

彩斗が医工騎士、詠唱騎士、そして紅葉と同様手騎士の称号を持っている。

そのため紅葉が前線に立ち、彩斗が後方支援サポートに回るといふ戦闘スタイルが取られている。

燐は頭を抱える雪男に「別にいいじゃねえかタメで」と笑いながら言い、「兄さんしかできないよそんな事!!」と彼に怒鳴られてしまっていた。

「皆落ち着いて!さっさと任務終わらせよ?終わったら何か奢ってあげるからさ」

「マジか!!」

目を爛々とさせ、喜ぶ燐に思わず頬が緩んでしまう彩斗と紅葉。親兄弟のいない紅葉と彩斗にとって、燐や雪男は家族のような存在だ。

——たとえ血が繋がっていなくても、絆は本物の家族のように深いのだ。

「にしても…よかったですか?聖騎士の任務に同行させて貰えるなんて…」

「おう、雪男や燐がいると心強いし…それに今回の任務は候補生^{エクスワイア}でも出来るような簡単なものだよ」

「被魔師は万年人員不足だからね」

今回紅葉達が受けた任務は危険性の少ない鬼^{ゴブリン}の始末だ。

鼠や土竜などの小動物に憑依する悪魔で、いたずら程度の魔力しか持たないが、動物の腐った血の臭いを嗅ぐと興奮し、狂暴化してしまうという色々と厄介な悪魔なのである。

その鬼が町はずれの森で大量発生しているので、被害が出る前に駆除^{ゴブリン}してしまおうという事だ。（説明軽いか言わないの）

「悪魔駆除だったら昼間に来れば簡単に済むじゃないですか…なんでこんな夕方になって来たんです？」

雪男の言うとおり今は夕方だ。

悪魔は昼間よりも夜の方が活発だ。

駆除するなら昼間の方が有効的だろう。

「い、いや…それは…」

「紅葉ちゃんが寝坊したんだよねー？」

「お、俺だけじゃねーし！お前もだろ！？」

「おいらの方が1分早く起きたもん！」

「たった1分じゃねーか！」

「それでもおいらの方が早いのは変わりないもん！！」

低レベルな言い争いをする紅葉と彩斗を見て雪男は溜息を吐き、燐はケラケラと笑っている。

周りから見たらただ喧嘩をしている様に見えるがこれが彼女達にとつてのスキンシップみたいなものだ。

現に彼女たちはお互い笑いながら言いあっている。
なんとも仲睦まじい光景である。

「紅葉さんに彩斗さんも…結局何時に起きたんですか？」

「おいらは15時30分！」

「俺は15時31分だ」

「ぶつ・・・！3時とか遅っせー！…どんだけ寝てんだよ！俺でも朝8時に起きるのに！」

「どんぐりの背比べとはこのことをいう気がする…」

雪男は今日何回目か分からない溜息を吐いた。

「と、とにかく！さっさと任務終わらせて彩斗にチュッ。チャップ

入奢ってもらうぞ！」

紅葉は腰に巻いているウエストポーチから銃を取り出し、弾を込める。

一方の彩斗は肩から下げていたボストンバックから聖書を取り出した。

「って彩斗、ちょっと待て……」

「ん？なに？」

「お前確か致死節^{ちしせつ}全部暗記したって言ってたか？」

致死節というのは大抵の悪魔に存在する死に至る言葉や文節の事だ。彩斗は詠唱騎士^{アリア}の称号を持っているため詠唱で悪魔を倒すのだが……、

「憶えてはいるんだけど……ド忘れしちゃうんだよねよく……」

えへへー、と彩斗は笑う。

「笑いごとじゃねえぞ！？いい加減ド忘れ無くせて何回言っただと思っただ！？」

「だ、だって……！ヨハネの聖書とか何章あると思っただの！？勝呂君と違って並の記憶力なんだからそんな無茶な事言っただ！？」

「お前詠唱騎士だろ！？そして聖騎士だろ！？だったら憶えるよ！根性で！」

「おいらそんな熱血キャラじゃな！いつ！」

「二人ともいい加減にしてください！！！」

雪男が止めに入ったところでやっと落ち着き、気を取り直して戦闘準備に入る。

「んじゃ準備はいい？」

紅葉の言葉に三人はコクリ、と頷く。

「行くよ……」

紅葉の手に握られている小瓶の中には赤い液体が入っていた。

赤い液体の正体は腐敗した動物の血だ。

鬼をおびき出すにはこれが一番手っ取り早い。

三人が頷いたのを確認すると小瓶のふたを開け、前方に投げた。

その瞬間、

——ア、ア、アアアアアアア……！！

何処から湧いてきたのか、大量の鬼達^{ゴブリン}が血の匂いに当てられ、巨大化、暴走している。

想像を遥かに超える数の鬼達^{ゴブリン}が四人を取り囲んだ。

「ちょ…こんなに？」

「お、多すぎる…」

「や、やっぱり昼間来た方がよかったじゃん…！」

「…………ええい！そんなの気にしてられるかつ！っていても多すぎだろこれは！」

「なんだよお前らー！ビビってんのか？」

隣がだっせーと言い、紅葉達を馬鹿にする。
が、紅葉達は決して怖がっているのではない、むしろ逆だ。

「ちっげーよ！！怖いんじゃないかってめんどくさいんだよ！！！！」

「あ、ああ…そっちな」

「これだけの数の鬼^{ゴブリン}…今まで何もなかったのが不思議なぐらいだね」

彩斗の言うとおりだ。

これだけの数の鬼ゴブリンが居てなぜ今まで被害がなかった？

この森は街外れに位置しているとは言え、人の立ち入りなどが禁止されているワケでもない。

本当に今まで何もなかったのは奇跡だろう。

「にしても…本当に数が多いな」

「さすがに骨が折れますね…、」

紅葉と雪男ユフリンは鬼に銃を向け、倒しながら言う。

「われら、日々、御身に謝し、世々にいたるまで 御名をたたえ奉る。主よ、今日われらを護りて——…」

「うおっ！？あつぶねー…」

彩斗は鬼ゴブリンの致死節を詠み、燐は詠唱中で無防備な彩斗を援護する。

こうして見ると本当に息がピッタリな四人とわかる。

何も作戦を決めていないのにこうしてスムーズに倒していけるのだから。

「主よ、われ御身に依り頼みたり、わが望みはとこしえに空しからまじー！ー」

——ア、ア、アアアアアッ！！??

彩斗の詠唱が終わり、詠唱を聞いていた鬼達は一斉に倒れた。

百以上居たと思われていたゴブリン達はあっという間に姿を消してしまっただ。

四人がいかに強いのか、これを見れば分かるだろう。

「さて…終わったかな」

「さすがに多すぎだったね…」

「今度からは寝坊しないでくださいよ二人とも」

「そうそう！昼間だったからこそまで手こずらなかったかもしんねーじゃん」

聖騎士二人は言い返せない。

「ま、まあ終わったことは気にしないの！さて、帰ろうか！」

彩斗の言葉を聞いた三人が帰るため、歩き出そうとしたその時、

——ガブッ！！

「つい!？」

「な、！」

紅葉と彩斗は突然の痛みに顔を^{しか}顰める。
見ると彼女たちの足に鬼が^{ゴブリン}噛みついていた。
が、様子がおかしい。

「ちょっと待て!この鬼色^{ゴブリン}がおかしい…!」

「ほ、ほんとだ…どういうこと…?」

「彩斗!紅葉!」

「今助け…っ!？」

燐と雪男が助けようとした時——二人が消えた。

「彩斗…?紅葉…?」

「き、消えた…?」

二人は状況が掴めず、呆然と立ち尽くす。

それはそうだ。
いきなり人が消えたのだから。

「っ！彩斗！紅葉！返事しろよ！！」

「彩斗さん、紅葉さん！！」

——シーン——

返事は返ってこない…。

「どうなっているんだ…！？」

雪男は驚きと二人がいなくなった悲しみからか、複雑な表情だ。

「っ…！」

燐は下を向いて肩を震わせる。

「な、んで…！」

燐は目に涙をたくさん溜めて、今にも泣きだしそうな顔をしていた。

なんて言っただけで二人が…紅葉と彩斗が自分の目の前でいきなり消えたのだから。

燐にとっても紅葉と彩斗は本当の家族のような存在だった。

勿論雪男にとってもだ。

幼い頃から周りから「悪魔」、「化け物」などと罵られてきた燐。そんな燐を励まし、ずっと傍を離れずにいてくれたのは紅葉と彩斗だった。

彼女達は燐を遠ざけようともせず、ずっと優しく接してくれていた。そんな彼女たちの事が燐は大好きだった。

恋愛感情とかそういうのではなく、友達として…家族の様な存在として大好きだった。

その二人が自分の目の前で突然いなくなったのだ。ショックに決まっている。

「紅葉…！彩斗…！何処行っちゃったんだよ…ッ！！」

燐の震えた声が辺りに木霊した…。

プロローグ（後書き）

どうも！彩斗。っていいます（´・ω・｀）

このたびは読んでくださりありがとうございます…！

ど、どうだったでしょうか？

初めて自分で書いた小説…、色々とヒドイです（´・ω・｀）

もしよければ感想など頂けたら嬉しいです！

ここまで読んでくださった方本当にありがとうございます！
これからこの小説をよろしく願います！（´・ω・｀）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2772y/>

抜魔師と新選組

2011年11月15日14時38分発行